

「嘉子」 ～ シュガレット・ド・パフューム ～



Sugarette de perfume

嶺井嘉子

Minei Yoshiko

目次

はじめに 4

〈第一部〉 「母と私」 5

〈第二部〉 シュガレット 「家庭」 15

〈第三部〉 「青春」 しど・パフュームし 25

〈第四部〉 スクランブル・シュガレットし 「大阪」 35

〈第五部〉 シュガレットし変革し 「鹿児島」 49

し終わりにし 85

はじめに

私^{わたし}（以下全部「わたし」と読む）の記憶にある事柄を書くにあたり周りの人々に迷惑をかけるかもしれない事について改めてお詫びを致しておきます。

現在、令和5年4月23日。誕生日の二日前、63歳になろうとしています。

シユガレットとは、シユガー（砂糖、この場合、愛と訳す）と、タバコ（煙草⇨シガレット）の造語です。

パフュームとは、香り（つまり香水）とは切り離せない私の人生です。

〈第一部〉「母と私」

ウーウーウーと空襲警報が鳴っている。

火の雨が降り注ぐ中で、私の母「セツ子」昭和20年6月、女学校の卒業の日。鹿児島市内でも、この空襲で2316人、多くの人々が亡くなった。防空壕を目指して、逃げまどう人々、その渦中に、母もいた。火の粉が、母の被っていた頭巾に燃え移って、危うく火に包まれかけたが、かろうじて命はとりとめた。カバンに入っていた聖書が粉々に焼け灰になり、母いわく「神様が助けて下さった」と。幸い近くにいた、兵隊さんが、葉を塗ってくれた。今でも、母の頬には、小さなヤケドの跡がある。

その後、母は市役所に勤務。以来、39年間続いた。

母の母（つまり祖母）は、自由奔放な母に実直な一人の男性をお見合いさせ、結婚させたが、長くは続かなかった。そして、母は、祖母の反対を押し切り、駆け落ち同然で、結婚。母、31歳。

私は、母セツ子と、「田籠義一郎」^{タゴモリキイチロウ}の子として、昭和35年4月25日、「義子」^{ヨシコ}として生を受ける。

母が布団から転んだ為、逆子で、予定日を過ぎても生まれぬ。医者は、「母体をとるか、赤ちゃんをとるか」の選択を迫る。

父は「子供は諦める」の一言で、母だけが「産む」という決断をした。母は、麻酔の無いまま（母体

に危険で部分麻酔のみ)「ヤブ医者」と母の罵倒の中、帝王切開で、私は生まれた。ヘソの緒が首にグルグル巻きついたままで、処置の後、背中をパンパン叩かれて、やっと産ぶ声をあげたそうさ。至って大きな赤ちゃんで、男の子の様だったらしい。

その後、母セツ子は、動物園の受付勤務。(当時は動物園は鹿児島「鴨池」、街中にあった)近所の優しい人の手をかりて、授乳時間に連れて来てもらい、私は母乳で育つ。スクスクと育っていった。

その頃、父は事業の失敗で、銀行に多額の借金を残したまま行方不明。覚えてるのは私の父もヘビースモーカーで、私の小さな手の小指に、タバコの火があたったくらいのこと、喧嘩っ早い人だったと記憶している。父に貰った唯一の、フランスの子供を模したセルロイドの人形だけは現在も持っている。

私は4歳、恋をした。母の勤める動物園の冊越しに見たオットセイ。その優雅な泳ぎとお香の匂いがある中、ずっと見続けて、水をかけられながらもその場に立ち止まり、母の勤務が終わる夕方まで、通い続けた。愛くるしいつぶらな瞳と、口ヒゲ、つるつるの頭、流れるような形のあの顔が好きだった。いつも、断ち切れない思を募らせ、一人見続け、イヤイヤ帰ったものだ。

その後二年程して、母は市役所本部勤務となり、行方不明の父の借金を肩がわりする事を条件に、裁判所に行き協議離婚となる。

私の名も「義子」から「嘉子」に改名。母の実家の祖母の姓を名のり、「川畑嘉子」となる。

祖母の生活の面倒一切は、母がみていた。後に、祖母の小さな家を建てたのも母である。

奄美出身の祖母は、孤独な人で、大阪で別の女性と暮らす祖父とは離婚しないまま、母と母の妹と（二人が結婚した後は）一人であった。祖父の事は、実のところ、私も従兄弟も一度として、祖父に逢った事がなく、（昭和48年死去していた）とうの昔に亡くなったものと思っていた。祖母は、私（当時、6歳くらい）相手に昔の事をよく話していた。躰に厳しい人だったが、忙しい母と違って、手づくりのみそ汁、サラダ、卵焼き等料理は、どれでも祖母の作る食事は美味しかった。以来、私は人様の作った手づくりの料理は、有り難く、全部頂く。

今、思うと、祖母は、やはり孤独な人生だった、と思う。椿油のあの独特な匂い。よく、布団の中で、ずっと携帯ラジオを聴いていたものだ。特に、島唄が流れると喜んだ。

生まれてからずっと、私の姿は、母の好みで、髪は長く、おさげ（出勤前の母が編んでくれた）にし、

ヒラヒラのスカート等女の子らしい格好ばかり。それ故に、変な、自転車に乗った中学生に追いかけてわされたりした。

反動でそれ以来、ボーイッシュで、髪も短く、格好もかまわなくなる。シャンプーの匂い、石けんの匂いが好きで、母のポーラの香水がきつかったのを覚えている。

今日、令和5年4月25日。私は、63歳になった。春というのに、鹿児島市は寒く、冬物の厚手のカーディガンが手放せない。「律^{リッ}」から「おめでとう」の電話があった。私が愛用のパフュームを尋ねたところ、「私は、エリザベスアーデンのアイス・ド・グリーンティ」と答えた。私は、毎日ずっとブルガリをつけていなければ過^ワごせない。雑事に追われ一日が早い。子供の頃は、一人つきりで、夜も長く、テレビもラジオも早く終了し、一日を長く感じたものだ。私は、今現在も、電灯無しでは眠れない。長く生きてきたものだ、と思う。我ながら『書くの?!』『書く事が好きだから』と、タバコを燻らしながら自問自答。

偉そうな事を書いているが、私は、ひとつも、数学が出来ない。加えて、機械オンチである。必要に迫られて新しく買ったケイタイひとつ、上手に使いこなせない。今日も、久々に手にした映画雑談のス

クリーン・フォトのサイトにアクセス出来ず、プロのアドバイスをもらったら「パソコンか、タブレットでしか、またはスマートフォンでしか操作出来ない」との事で諦めた。久々に読んだ活字は血が通わない冷たい印象で、時代の流れを感じた。

基本的に人が好きだ。私は子供の頃、一時は母を母親として許せなかったが、一人の人間として受け入れた瞬間、楽になった。愛すべき二人の女性。私は、母の耳朶みみたぶを触るのが好きで、忙しい母との短いながらのスキンシップも好きだった。

母には、「ヒナ」という女学校時代からの悪友がいた。このおばさんは、夜の世界に詳しく、母に色々、良からぬアドバイスをして、いつも私を悩ませた。男の子が二人いたが、離婚後、一人の家庭ある男性の、愛人として一緒に暮らし、女としての道を選んでいた。私にも、「セツちゃんは、母親であるまえに、一人の女だから、そのへんは、わかってあげないと」と、6歳の私に、うそぶいた。小料理屋しており、母が再婚してからも、ちよくちよく、トラブルを起こし、私の新しい家庭にも、波風を立てた。晩年は、男の子二人に捨てられて、苦勞し、現在、消息は不明。母いわく「あの頃は、よく遊んだものだ。」母も、今、彼女が、生きているか死んでいるのか、わからない、と言う。